

1968年の バイク世界一周旅行

Motorcycle
Touring
Around
The
World
of
1968

大迫 嘉昭
Yoshiaki Osako



行程

旅立ち 世界一周へ

15

アメリカへ

21

葡萄園でのアルバイト

35

庭師の助手

57

墓地で働く

66

学校と日々の生活

74

ベトナム戦争と公民権運動

93

バイクで帰国へ

98

東京ローズ

102

横転事故

104

ルート66

107

雨の中西部

114

落雷事故

120

ニューヨーク ロバート・ケネディ暗殺・葬儀

123

豪華客船で大西洋横断 ヨーロッパへ

129

リスボン バイクはナポリへ

133

ナポリからヨーロッパ大陸ツーリングへ

138

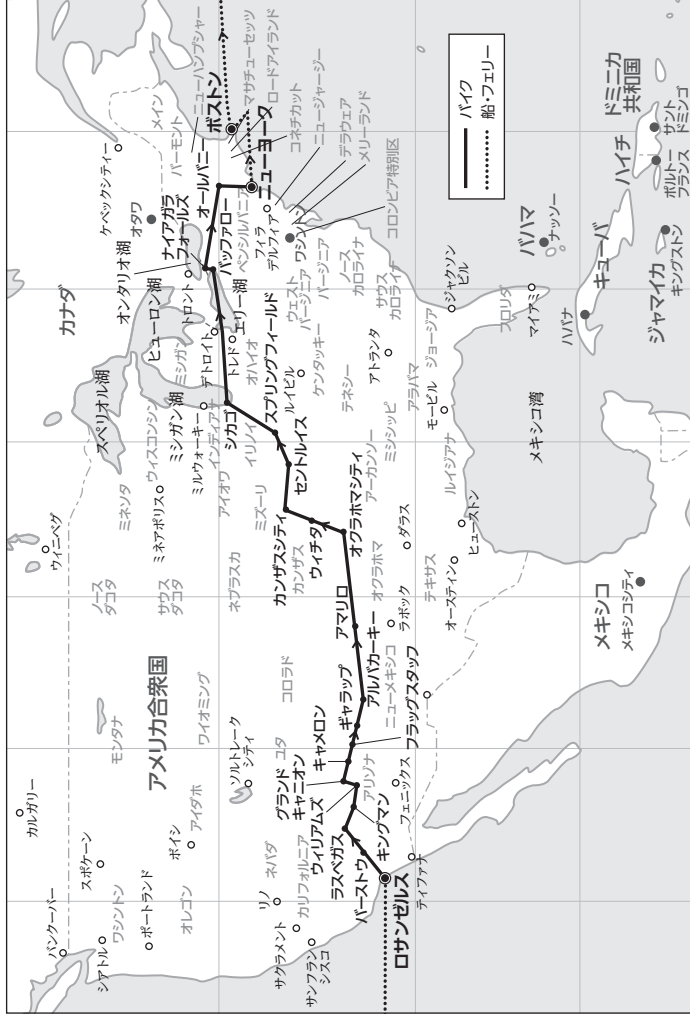
ピレネー山脈越え フランスへ

149

ロンドン

154

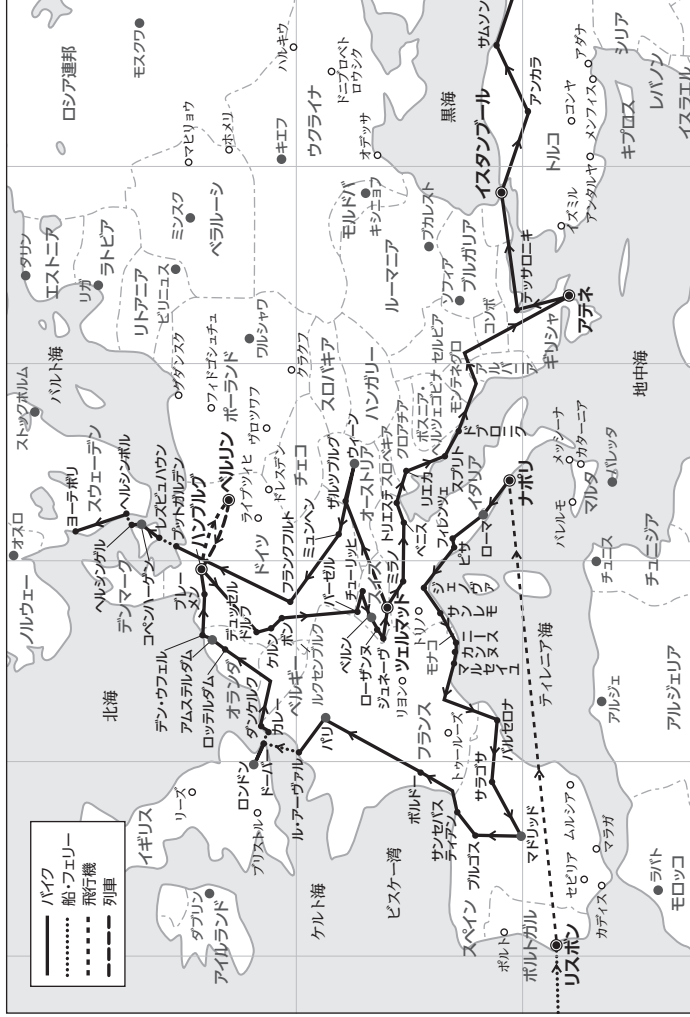
ダンケルク、アムステルダム	156
東ベルリンでの出来事	160
ツエルマットの出会い	167
ウィーン ソ連軍チエコ侵攻	169
ミュンヘンでの再会	171
北欧 忘れられない想い出	173
バルカン半島を南下 ギリシャへ	178
エーゲ海 ヒドラ島での休暇	182
中近東への出発	185
雨と寒さのトルコ横断	188
砂漠と強盗のイラン・アフガニスタン越え	191
インド国境 入国不許可	203
無事ボンベイ着 そして日本への船旅	205
あとがき	



アメリカ合衆国からヨーロッパへ

〔1968年5月19日出発〕

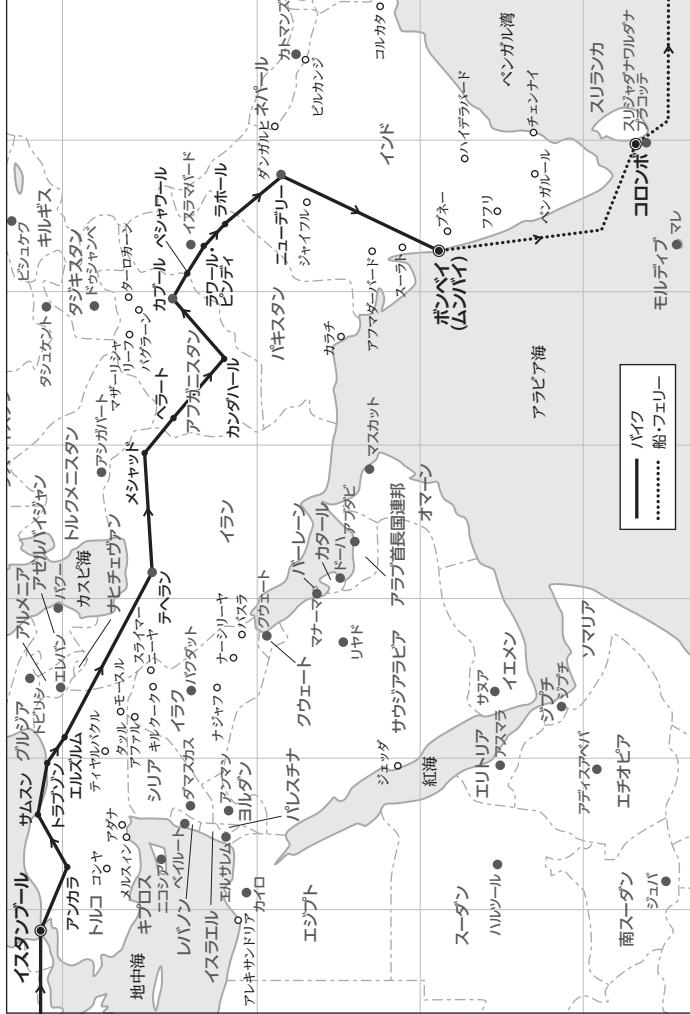
ロサンゼルスーバーストウーラスベガスーキングマンーウィリアムズーグランドキャニオンーキャメロンーフラッグスタッフーギャラップーアルバカーキーーアマリローオクラホマシティーウィチターカンザスシティーセントルイスースプリングフィールドーシカゴーバッファローーナイアガラフォールズーオールバニーーニューヨーク〔1968年6月10日着〕……船……ボストン



ヨーロッパから中近東へ

ボストン …… 船 …… リスボン(ポルトガル) [1968年6月18日着] …… 飛行機 …… ナポリ—ローマ—フィレンツェ—ピサ—ジェノヴァ—サンレモ(イタリア)—ニース—カンヌ—マルセイユ(フランス)—バルセロナ—サラゴザ—マドリード—ブルゴス—サンセバスティアン(スペイン)—ボルドー—パリール・アーヴァル(フランス) …… 船 …… ドーバー—ロンドン—ドーバー(イギリス) …… 船 …… カレー—ダンケルク(フランス)—ロッテルダム—アムステルダム—デン ウフェル(オランダ)—ブレーメン—ハンブルク …… 飛行機 …… 西ベルリン …… 汽車 …… ハンブルク—デュッセルドルフ—ケルン—ボン(西ドイツ)—バーゼル—チューリッヒ—ベルン—ローザンヌ—ジュネーヴ—ツェルマット(スイス)—ザルツブルグ—ウィーン(オーストリア)—ミュンヘン—フランクフルト—プットガルテン(西ドイツ) …… 船 …… レズビュハウ—コペンハーゲン—ヘルシゲル(デンマーク) …… 船 …… ヘルシボル—ヨーテボリ(スウェーデン)—ツェルマット(スイス)—ミラノ—ベニス—トリエステ(イタリア)—リエカ—スプリト—ドブロニク(ユーゴ・現クロアチア)—アテネ(ギリシャ) [1968年10月12日着]
 [1968年10月18日発] アテネ—テッサロニキ(ギリシャ)—イスタンブール(トルコ)

(国名・国境は2015年現在)

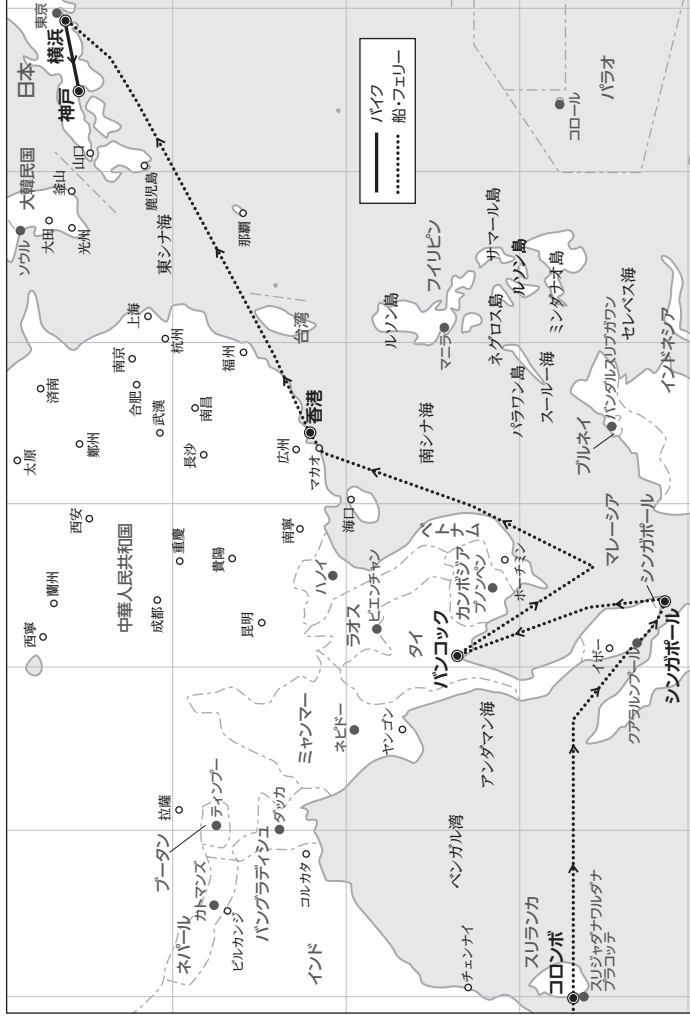


中近東からアジアへ

イスタンブールーアンカラーサムスンートラブゾーンーエルズルム(トルコ)ーテヘランーメシャッド(イラン)ーヘラートーカンダハールーカブール(アフガニスタン)ペシャワールーラワールーピンディーラホール(パキスタン)ーニューデリーーボンベイ〔1968年12月11日着〕

〔1968年12月15日発〕ボンベイ(インド)……船……コロンボ(スリランカ)

(国名・国境は2015年現在)



アジアから日本へ

コロンボ(スリランカ) …… 船 …… シンガポール …… 船 ……
 バンコック(タイ) …… 船 …… 香港 …… 船 …… 横浜 …… バ
 イク …… 神戸 [1968年12月27日着]

(国名・国境は2015年現在)

旅立ち 世界一周へ

人は未知のものに憧れ 旅立ち

苦難のあとには 辿っただけの

すばらしい足跡と 思い出が残り

それが人生を豊かにするのではないだろうか？

一九六七（昭和四十二）年十二月、世界中の観光資源を調べながらの、「バイク世界一周旅行」を思い立ち、留学先の大学を辞めた。

身の回りの物を整理しながら、友人やお世話になった人たちにあいさつ回りに出かけ、暇を見つけてはサンタモニカやレドンドビーチへ釣りに行き、解放感を味わっているうちにバイク旅行に最適な季節、五月が巡ってきた。



絶景とはまさにこのこと。鋭く天をついたマッターホルンは白く、きびしい自然の美しさをまざまざと見せて迫ってきた。

(1968年7月)

部屋の窓を開け夜空を見上げると、何億年も前に遠いところからやってきた光が無数の星となり、宝石を散りばめたように輝いている。それに比べると人間の一生なんて、せいぜいで百年だ。流れ星が左から右へ消えていく時間にも足りないぐらいに短い。人間の寿命は宇宙の時間に比べ一瞬だと知りながら、有史以来、人間は殺し合いをやめない。主義主張と人間の命とはどっちが大切か、皆わかっているはずなのに殺し合う。平時では虫も殺さない人間が戦争になると平気で人を殺す。人間はどうしてこうも愚かなのだろうか？

当時、世界一豊かなアメリカに住みたいがため、主義主張もなく、戦争まっただなかのベトナムの前線に送り込まれる可能性の高いアメリカの軍隊に、命と引き換えに志願した日本人がいた。そうまでしてアメリカの永住権を手に入れる価値があるのだろうか？ そのような危険を冒してまで永住権を得るよりも、限られた時間の中で、世界の観光資源を訪ねながらバイクで旅行するほうが、ずっと価値があると思っていた。

一年を通じてほとんど晴れのロサンゼルスに雨が降ると、太平洋からさわやかな風がロサンゼルスの大盆地を吹き抜ける。街全体を覆っているスモッグは北の丘陵地帯に押し流され、幾重にも重なった周りの丘陵や遠くの山々が驚くほどくっきりと浮かび上がり、街が名のごとく

「天使 (Los Angeles) の街」になる。

その朝、一九六八(昭和四十三)年五月十九日、隣室の老ガーディナーと「デニーズ」で別の朝食を摂り、二千二百ドル(当時のレートで約八十万円)ほどのトラペラーチェック、カメラ、皮のズボン、下着各一枚、背広上下一着、布などを入れた布製の袋をバイクの後ろに括り付け、ハンドドルにはテント地の水筒をぶら下げ、一路、ニューヨークをめざし、ロサンゼルス近郊パサディナからルート66を東へ走り出した。

一九六二(昭和三十七)年、NHKで放映された青春アドベンチャー・ストーリー『ルート66』、ロサンゼルスとシカゴを結ぶルート66と呼ばれるハイウェイを、二人の若者がコルベック・ステイングレーに乗って旅しながら、途中で出会う様々な人物と事件、それに、ナット・キングコールの主題歌『ゲッツ・キックス・オン・ルート・シックスステイ・シックス』が鮮明に記憶として残っていたことも一因だが、作家ジョン・スタインベックが『怒りの葡萄』に描いた、あのルート66を旅してみたいという気持ちが強かった。この小説は、カリフォルニアへ移住するオクラホマの農民一家が、偏見や貧困といった様々な問題を乗り越え、明るい未来を求め西部へ向かうという作品だ。その中で、スタインベックは、このルート66を「マザーロー

ド」と呼び、克明に描写している。だから、私にとつてあの有名なサンタモニカからシカゴまでの二千三百四十七マイル(三千七百五十五キロ)、ルート66を走るとは、自然な成り行きだった。それ以外のルートを走ってアメリカ横断することは全く思いもしなかった。バイクを購入してから出発するまでは、一日で最も長く走った距離は百キロにも満たなかったが、ラスベガスまで約五百キロ走ることには何の不安もなかった。

雲ひとつない砂漠の中を一直線に伸びるハイウェイ、五月のさわやかな風と太陽を浴びながら、私のバイク「ヤマハYMI」は、エンジン音と耳元で風を切る音だけが支配する中を快走する。それはライダーだけが感じる自由と解放感に満ちた心地よいツーリングだ。

ロサンゼルスとラスベガスの中間にあるバーストウは、ガソリン・スタンドとレストランが数軒あるだけの、西部劇に出てくるような小さな町だ。ここからルート66はラスベガスへ向かうルート15と枝分かれして南東へ延び、アリゾナ州のキングマンへと続く。バーストウはロサンゼルスからラスベガスやルート66を通り東へ旅する人には、給油のため、またレストランで休憩をとるための重要な場所であった。

ここバーストウから北へ約十キロほど行くと、昔の鉱山跡があり、「キャリコのゴーストタウン」として観光客に人気がある。日本の観光客にも、ロサンゼルスからラスベガスへ移動するとき、このゴーストタウンを訪れることを勧めようと写真を撮り、案内所で資料を集め、ノートに簡単な印象などをメモした。

砂漠では夕日が地平線に沈んだ途端、夕闇があたり一面を覆う。すると、ラスベガスの四十キロほど手前、カリフォルニア州とネバダ州の州境あたりから東の空がまばゆいばかりに明るく輝き出す。不夜城ラスベガスの灯りだ。

当時、日本が今のように豊かな国になるなど思いもしなかったので、帰国して航空会社に就職できれば別として、アメリカに比べ賃金も安く、土曜日も働き、長期の年休も取れない日本の会社に就職すると、もう二度とアメリカに来ることはできないと思い、「ラスト・チャンス」とばかり、ギャンブルのメッカ、歓楽街ラスベガスに宿泊することにした。

ラスベガスでは、勝つ確率の低さやこれから先どれほどお金が必要か知りながらも、ブラック・ジャックに手をだし、幸運にも約二百ドル(三万六千円)勝った。

出発前に計算していた、モーター代、ガソリン代、食事代などは一日十五ドル、ニューヨークまで二週間かかるとして、計二百十ドルは必要と思っていたが、この夜は数時間でアメリカ大陸横断分の費用を稼いだことになる。

翌朝、ラスベガスから日帰りで「デスバレー（死の谷）」へ行き、キャリコのゴーストタウンと同じように写真を撮り、パンフレットを集め、メモをとった。もともと日本の観光客にデスバレーが受け入れられるかどうかわからなかったが。

次の日は疲れて朝寝坊し、出発は昼前になった。ラスベガスから北東へルート93を一時間ほど走ると、コロラド川をせき止め造られた日本の黒部ダムによく似たフーバーダムがある。このダムの上は道路になっており、ここを通過するとアリゾナ州で、ネバダ州とは一時間の時差がある。

ロサンゼルスからラスベガスへの途中、ルート15とバーストウで枝分かれしたルート66はルート93と交差する地点、キングマンへと向かう。この町はガソリン・スタンド、レストランなど数十軒ほどしかない小さな町だが、グランドキャニオン、ラスベガスへの交通の要所だ。ルート66はキングマンから東へ延びる。（当時ルート66は大規模な工事中で、一九八五年、「（I-40）インターステーツ40」となり、その後廃線になったが、最近、歴史的な道路として、再び世界中の愛好者に脚光を浴びている。）

フーバーダムを越え、アリゾナの赤土色の山肌に沿ってルート93を上りきると、そこから先は見渡す限り草木一本生えていない本物の砂漠が下方へと広がる。はるか遠くの山並みが霞み、砂漠の中を片側二車線の広いハイウェイが一直線に南へ伸び、すれ違う車もほとんどない。雲ひとつない紺碧の空、すべてのものを焼き尽くすような太陽の光も、風を切って走る私にはさわやかだ。いくら走っても風景は変わらず、同じ場所に留まっているような錯覚に陥る。心地よいリズム感あふれたエンジンの金属音の響きの中で、アメリカ留学を志したあのころを思い出していた。

アメリカへ

一九六二（昭和三十七）年、私は大学と同時に大阪の旅行会社に就職した。当時、日本は発展途上で外貨事情が悪く、特別に政府の許可を得た日本人以外は、海外旅行など夢のまた夢だった。そのような中であって旅行業界は一九六四（昭和三十九）年の東京オリンピック開催を控え、海外旅行が自由化される雰囲気も漂い、社内の誰もが添乗員として外国へ行けると期待に満ち溢れていた。しかし、その期待と裏腹に、私もそうであったが、社内には英語を話せる社員はほとんどいなかった。

これからの旅行会社勤めの人間には英語は必須である。それならば英語を本場アメリカで学